天然痘根絶３０周年記念事業
実績報告書

平成 22 年6月2日

報告者：国立大学法人　熊本大学

：天然痘根絶３０周年記念事業実行委員会

目　　次

実績概要　・・・・・・・・・・1

収支計算書　・・・・・・・・・・4

監査報告書　・・・・・・・・・・5

資料（新聞記事）　・・・・・・・・・・6

資料（アンケート結果）　・・・・・・・・・・9

記録写真　・・・・・・・・・・13

WHO マーガレットチャン事務局長
メッセージ　・・・・・・・・・・15

記録写真　・・・・・・・・・・16

熊本中央高等学校看護学科
　看護専攻科１年生感想文集　・・・・・・・・・・21

実行委員会役員名簿　・・・・・・・・・・42

天然痘根絶３０周年記念事業実績報告

天然痘根絶３０周年記念事業実行委員会
実行委員長　永野　光哉

国立大学法人　熊本大学並びに天然痘根絶３０周年記念事業実行委員会が主催し、開催しました天然痘根絶３０周年記念事業について下記のとおり報告いたします。

１　事業名：天然痘根絶３０周年記念　記念講演会&シンポジウム
２　日　時：平成22年６月２日（水）　午後１時30分　～　午後４時25分
３　会　場：熊本県立劇場演劇ホール
（熊本市大江２丁目７番１号）
４　参加費：一般　１，０００円　　学生　無料
５　主　催：国立大学法人　熊本大学
：天然痘根絶３０周年記念事業実行委員会
６　共　催：株式会社　熊本日日新聞社
７　後　援：厚生労働省・外務省・熊本県・熊本市・熊本県教育委員会・熊本市教育委員会・熊本県医師会・熊本市医師会・熊本県歯科医師会・熊本県薬剤師会・熊本県看護協会・熊本県医療保健福祉団体協議会・熊本ロータリークラブ・国際ソロプチミスト熊本・国際ソロプチミスト熊本ーすみれ・国際ソロプチミスト熊本ーさくら・国際ソロプチミスト熊本ーわかば・熊本ユネスコ協会・日本ユニセフ協会熊本県支部・
NHK熊本放送局・RKK・TKU・KKT・KAB・FMK・FM７９１
８協賛団体：財）化学及血清療法研究所、社団）熊本県医師会、社団）熊本県看護
(50音順)　会、熊本県庁職員有志、社団）熊本市医師会、熊本市職員有志、㈱熊本日日新聞社、熊本保健科学大学、九州保健福祉大学、医社）寿量会熊本機能病院、東海大学九州キャンパス、㈱肥後銀行、(有)ファーマダイワ、
９助成団体：熊日文化スポーツ基金、熊本放送文化振興財団
10　世話人会　：平成22年３月30日（火）　　会場：熊日倶楽部
11　実行委員会：第１回　平成22年４月15日（木）会場：熊本市国際交流会館
第２回　平成22年５月17日（月）会場：熊本市現代美術館
第３回　平成22年７月　８日（木）会場：熊本市現代美術館
12　記者会見　：平成22年５月10日（月）　　会場：熊本県庁記者クラブ
（会見者）永野光哉実行委員長、﨑元達郎副実行委員長（前熊本大学学長）、
村田信一副実行委員長（熊本県副知事）、世良喜久子副実行委員長、
13　記念事業参加人員　：　約１，２７０名

内訳（高校生 800 名、専門学生 70 名、大学生約 100 名、一般約 300 名）

14　記念事業内容（記念講演&シンポジウム）

開会（総合司会　小出　史）　　１３時３０分

主催者挨拶

天然痘根絶３０周年記念事業実行委員会　永野光哉　委員長

国立大学法人　熊本大学　谷口　功　学長

メッセージ披露

世界保健機関（WHO）マーガレット　チャン　事務局長

代読　世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局感染症対策課

葛西　健　課長

基調講演

演題：「天然痘根絶と人類の未来」　～天然痘は本当に無くなったのか～

講師：元 WHO 世界天然痘根絶対策本部長

蟻田　功　博士

シンポジウム

テーマ：「天然痘根絶に続く世界の目指す課題は何か」

座長挨拶：国立感染症研究所副所長

倉根　一郎　博士

シンポジスト

元 WHO アメリカ事務局・感染対策部長

Dr.Ciro A de Quadoros

「天然痘根絶に続く計画」

WHO 西太平洋地域事務局感染症対策課長

葛西　健　博士

「インフルエンザとパンデミック」

シンガポール国立大学教授

前国立感染症研究所エイズ研究センター所長

山本　直樹　博士

「エイズと国際問題」

WHO 西太平洋地域事務局ベトナムプログラム代表

Dr.Jean-Marc Olive

「感染症制圧と移り変わる世界」

まとめ　　座長　倉根　一郎　博士

花束贈呈

講師、座長、シンポジストへ参加高校生・専門学校生・大学生より

閉会（総合司会：小出　史）　　１６時２５分

15　収　支：(収支計算書別紙)

1）収　入：3,８５９,７４４　円

2）支　出：3,８５９,７４４　円

3）剰余金：　　０　円

16　展　示：天然痘根絶対策活動・WHO 関係資料展示（五高記念館所蔵）

17　告　知：熊本日日新聞社

18　取　材：事前取材５月 31 日、６月３日記事掲載、６月５日特集記事掲載

当日取材６月２日報道各社

18　アンケート結果：添付資料

天然痘根絶30周年記念事業収支計算書

収入

項　　目	予　　算	決　　算
プログラム広告収入	350,000円	0
チケット販売収入	400,000円	556,000円
協賛金収入	2,000,000円	1,800,000円
寄付金	0円	515,700円
助成金、補助金収入	500,000円	500,000円
その他（繰入金収入）	0円	488,044円
合計	3,250,000円	3,859,744円

支出

項　　目	予　　算	決　　算
会場使用料	200,000円	161,918円
講師旅費	2,000,000円	1,268,483円
宿泊費	208,000円	135,820円
交通費	20,000円	26,610円
会議費	106,000円	317,432円
通訳費	200,000円	190,000円
印刷費	110,000円	397,715円
看板作製費	50,000円	0円
展示資料運搬管理費	0円	105,000円
通信費	40,000円	190,200円
消耗品費	30,000円	10,766円
保険料	20,000円	0円
謝金（講演会マネージメント・司会）	0円	180,000円
物品費	0円	22,591円
委託登録料（チケット販売委託）	0円	1,000円
資料（DVD）製作費	0円	315,000円
報告集（冊子）製作費	0円	336,000円
雑費（座長・シンポジストお土産代）	0円	18,468円
報告書送料（ブラジル）	0円	182,741円
予備費	266,000円	
合計	3,250,000円	3,859,744円

収支差額　＝　3,859,744　－　3,859,744　＝　0円

監　査　書

平成22年6月2日開催の天然痘根絶３０周年記念事業に係る、天然痘根絶３０周年記念事業実行委員会の収支について関係書類及び証拠書類を監査した結果、適正に処理されていることを認めます。

平成２２年６月３０日

九州看護福祉大学　理事長・学長　　二塚　信

熊本市医師会　　会長　　福島　敬祐

感染症対策「国際協調で」

天然痘根絶から30年

元WHO対策本部長　蟻田さん　熊本市で講演

世界保健機関（WHO）による1980年5月の天然痘根絶宣言から30周年を記念した講演会とシンポジウムが2日、熊本市の県立劇場であった。当時、WHOで天然痘根絶対策本部長を務めた蟻田功氏(84)＝同市＝が講演。国内外の研究者が感染症対策の現状を報告し、同氏の功績をたたえた。熊本大、記念事業実行委員会（委員長・永野光哉熊日名誉会長）主催、熊本日日新聞社共催。

蟻田氏は60年代からWHOで天然痘根絶にかかわり、67年から本格化した根絶計画を主導した。

講演では、WHOの当初方針を転換し、病気の発生状況を細かく把握して患者周辺にワクチン接種する「封じ込め作戦」を採用したことが根絶の決め手になった、と解説。世界最後の患者が残ったアフリカ・ソマリアでは、紛争状態で資金難に陥りながらも、国際的な協力が根絶を後押ししたことを紹介した。

蟻田氏は「科学的な研究に基づいた戦術を組み立て、人種や国、宗教、政治理念を超えた協力を実現したことが根絶を成功させた」と強調した。

シンポジウムでは、WHOのシロ・デクワドロ元米事務局感染症対策部長、ジャンマルク・オリベ西太平洋地域事務局ベトナムプログラム代表、葛西健・同局感染症対策課長と、シンガポール大の山本直樹教授が、ポリオ(小児まひ)や新型インフルエンザ、エイズなどの根絶に向けた現状をそれぞれ報告した。

（小多崇）

＝5日付朝刊くらし面に詳報

「天然痘根絶と人類の未来」と題して基調講演する蟻田功氏＝県立劇場（小野宏明）

熊本日日新聞　（第3種郵便物認可）

国際協力で封じ込め

元WHO根絶対策本部長 蟻田功氏

天然痘

根絶30年 記念講演やシンポ

天然痘根絶から30年を記念して2日、熊本市の県立劇場で講演会とシンポジウムが開かれた（熊本大、実行委員会、熊本日日新聞社共催）。世界保健機関（WHO）の根絶対策本部長として偉業達成に尽力した熊本市在住の蟻田功氏（84）が、根絶への戦術や当時の世界情勢を交えて講演。実行委（委員長・永野光哉熊日名誉会長）の呼びかけで世界中から感染症の専門家が集った。会場で示された今後の感染症対策への提言などをまとめた。

（文・小多崇、東寛明、写真・小野宏明）

蟻田氏はWHOの世界天然痘根絶対策本部長として、根絶計画をけん引した。講演で強調したのは「研究と戦術の重要性」だった。

接種方法を転換

WHOが1958年に始めた当初計画は、すべての人にワクチンを接種する手法。しかし、10年経ても収まらず、患者数は1000万人以上とみられた。

そこで蟻田氏らは、各国のワクチンの効き目をまず調査。70％が不合格という実態を浮き彫りにし、有効なレベルに改良させた。

さらに、接種方法に「封じ込め作戦」を採用した。「典型的な発疹で分かりやすい」という天然痘の特性を生かし、どこに患者がいるか細かく把握。家族や近所でワクチン接種を徹底した。作戦の裏付けは、限定的な接種が効果的とする米国の研究成果だった。

インドは当初、担当省庁は「方針転換できない。誰が責任を取るのか」との反応で、「官僚主義だった」と蟻田氏。しかし、首相のリーダーシップで封じ込めを実施し、2年足らずで「患者ゼロ」を実現したという。

「調査・研究の重要性を表している。科学的な研究結果に基づいた政策こそ、どんな分野にも必要だ」

各国から資金援助

最後の流行地域だったアフリカのソマリア、ケニア、エチオピアは紛争地域を抱え、定住しない遊牧民も多く、雨期には悪路が行く手を阻んだ。資金不足も表面化。蟻田氏は国際機関を通じ、デンマークやスウェーデンなど各国から資金援助を取り付けた。

ソマリアで世界最後の患者を確認後、世界中で「本当にゼロになったか確認」を2年間かけて実行。ここでも「研究の重要性」を貫き、各国の協力を得て、WHOによる80年5月の「天然痘根絶宣言」を実現した。「人種、国、宗教、政治理念を超えて協力できることを天然痘根絶は証明した」

十分な研究、戦術が成功

人種、国超えて「患者ゼロ」に

WHOの世界天然痘根絶対策本部長として、根絶計画をけん引した蟻田功氏。基調講演では、「研究と戦術の重要性」を強調した＝2日、県立劇場

蟻田功氏の講演資料より。右上から時計回りに「天然痘ウイルスの電子顕微鏡写真」「発疹（ほっしん）が広がったアフリカの少年」「スイス・ジュネーブの世界保健機関（WHO）本部」「ワクチン接種の様子」

◇ありた・いさお　熊本市出身・在住。熊本医科大（現・熊本大医学部）卒業後、厚生省入り。1962年からWHOアフリカ事務局、ジュネーブ本部ウイルス部、世界天然痘根絶対策本部などに所属。77年、同本部長。その後、国立熊本病院長、国際保健医療交流センター理事長などを歴任。県民栄誉賞、県近代文化功労者賞、熊日賞、WHO西太平洋地域事務局ポリオ根絶貢献特別表彰など受賞。84歳

生物テロの懸念

根絶された天然痘だが、将来的な不安も指摘した。天然痘による生物テロの懸念だ。米研究機関は2001年、「もしウイルスがばらまかれたら、3カ月で300万人の患者が出る」と報告。天然痘ウイルスの人工的な合成も可能になるとの予測もあるという。

蟻田氏は「根絶が成功したとはいえ、天然痘に注意を向け、対応できる計画を立てておくべきだ」と警鐘を鳴らした。

新型インフル

誤解された「フェーズ」

WHO西太平洋地域事務局感染症対策課長 葛西 健氏

世界保健機関（WHO）西太平洋地域事務局（本部マニラ）の葛西健・感染症対策課長は、2009年4月にメキシコで発生し、9週間で世界に広がった新型インフルエンザに関するWHOの情報発信について「フェーズの意味が、誤解されて受け取られた側面もあった」と話した。

WHOは同6月11日、パンデミック（世界的大流行）の対策レベルとしては最も高い「フェーズ6」を発表した。「フェーズは、どれくらい拡大しているかという程度を示すもの。しかし、重症度を示す指標だと誤解された。これは大きな反省点だ」と話した。また、ウイルスの感染力や毒性について国境を超えて広がるうわさについて、「感染のスピードより速かった」と、正確な情報を得ることに困難が伴ったことを明かした。

一方で、「若者の死亡が多い」という調査結果が集まり、「過去の新型インフルエンザのパンデミックに似ているという判断を後押しした」と話した。

また、世界中の専門家を電話でつないで情報収集したことなどを明かし、「感染症対策は、人と人を結んで、世界を結ぶことだという方向性を持っていたが、それに間違いはなかった」と結んだ。

葛西健・WHO西太平洋地域事務局感染症対策課長

患者家族や近隣にワクチン接種徹底

80年に根絶宣言

蟻田氏の講演や国立感染症研究所の資料をもとに、天然痘の特徴や根絶までの歩みをまとめた。

天然痘はウイルスによる感染症。急激な発熱や頭痛などの症状で始まり、発疹が顔や手足などの全身に生じる。感染力や致死率は高く、通常は患者の30%が死亡。失明などの後遺症もあり、発疹のあとは「あばた」として残った。

天然痘はワクチン接種による予防法は英国の医師ジェンナーが18世紀末に発見した。

日本では、明治時代に5000～2万人が死亡する流行が6回発生。終戦後の46年には患者数1万8000人、死亡者数3000人の流行があったが、ワクチンの緊急接種などで沈静化。56年以降の発生はなく、ワクチン接種は76年に廃止された。

世界的には60年ごろには、欧米や東アジアで根絶した。しかし、アフリカや南米、南アジアでは流行が続き、世界保健機関（WHO）は66年、新たな根絶計画を決定、翌67年から実施した。

新計画は、すべての人にワクチン接種する従来方法を改め、患者を発見してその家族や近隣へのワクチン接種を徹底する「封じ込め」を採用。患者発見に賞金も出したインドでは、73年から2年間で根絶した。

77年、アフリカのソマリアで「世界最後の天然痘患者」。WHOや各国政府による調査の結果、79年に世界中で天然痘「ゼロ」を確認。80年5月のWHO総会で、根絶成功が宣言された。

天然痘根絶までの主な出来事

1796年
英国の医師・ジェンナーが種痘を試み、ワクチンで天然痘を予防できることを発見

1958年
世界保健機関（WHO）が世界天然痘根絶計画

60年ごろ
ワクチン使用により欧州、北米、東アジアで流行なくなる

66年
WHOが新たな根絶計画を決定、翌67年から実施。当時の流行地域は、アフリカや南米、南アジア。年間13万人の患者が届け出られ、全体では1000万人以上と推計

73年
インドがWHO提唱の封じ込め作戦を採用、75年に同国での根絶に成功

75年
バングラディシュでアジア最後の患者を確認、アジア全域で根絶

76年
残る流行地域となったアフリカのエチオピア、ソマリア、ケニアで根絶作戦

77年
ソマリアで世界最後の患者。79年までに世界各国で「天然痘ゼロ」を確認

80年
WHO総会で天然痘根絶成功を宣言

感染症対策 発表者の詳報

日本はワクチン後進国

――山本 直樹氏

シンガポール大教授、元国立感染症研究所エイズ研究センター長。熊本大医学部卒。西原村出身

日本はロタウイルス、帯状疱疹などのワクチンが承認されていないワクチン後進国だ。

定期接種ワクチンが少なく、このほど始まった子宮頸がんワクチンも任意のため価格が高い。①医薬品の審査官の数が少ない②牛海綿状脳症（BSE）の影響でウシ由来製品の利用制限③エイズ裁判で血友病患者用血液製剤を承認した厚労省課長の有罪判決を受けて審査官が過剰に慎重―など理由だ。

おたふくかぜのワクチンも副作用が発生し死者も出たため、任意接種だ。ただ、副作用のないワクチンでは効果は期待できない。人工的に弱い病気を起こさせ、類似した恐ろしい病気を予防するのがワクチンの役目。根本的な考え方をもう一度思い返してほしい。

質の高い接種で撲滅可能

――シロ・デクワドロ氏

サビンワクチン研究所副所長。元WHO米事務局感染症対策部長

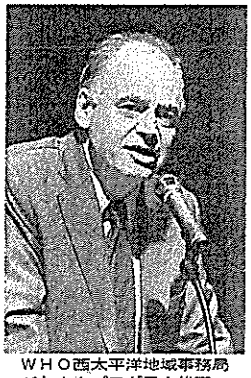
ポリオ（小児まひ）、麻疹（はしか）、風疹の撲滅は、1994年に南北アメリカ大陸からのポリオ撲滅宣言が出されるなど、西半球で大きな成果を上げている。世界の状況と撲滅の可能性を探りたい。

ポリオは今年、アフガニスタン、ナイジェリアなど4カ国から、根絶困難の報告が来ているが、感染遮断と完全なワクチン接種などで根絶可能。麻疹は南北アメリカでは大きな感染はなくなった。11年までに根絶可能だ。

風疹も1～4歳全員へのワクチン接種で南北アメリカでの根絶が達成された。今後はアジアなどに質の高いワクチンの接種と質の高い検証をしていくことで、撲滅は可能だ。天然痘撲滅に人類が経験した教訓を生かせば、必ず根絶できる。

アジアのリード役果たせ

――ジャンマルク・オリベ氏



WHO西太平洋地域事務局ベトナムプログラム代表。元国連HIVエイズ対策会議議長

中国では人口が1968年～2004年に7億9千万人から13億人に増えている。豚は520万匹から5億80万匹になった。世界では人間と動物の接触が増え、毎年3、4種の新しい感染症が発生している。世界は常に変化しているのだ。

一方で、2008年には2300万人の子どもたちが3種混合ワクチンを受けていない。このうち、4分の3が東南アジアとアフリカ。日本はアジアの中心となって、感染症対策をリードする役割を果たさなければならない。

人類が天然痘を撲滅したという経験は、家庭を一つ一つ回って、ワクチン接種の意義を説明し、理解してもらい、接種する作業を地道に続けていくことが大事だということを教えてくれている。

アンケート集計結果

1．とても勉強になりました。
2．これから天然痘のようなウィルスが現れると思うと恐ろしく思う。しかし、これから技術的にも人間は発展していくと思う。天然痘根絶のように世界中の人々が協力することができることは凄いと思った。貴重な講演会に参加できたことは幸運だ。「感染症を根絶してもそのことを忘れてはいけない」。という理由がはっきり分かったような気がする。病気の事に限らず人種、国等の立場を超えて協力する事の大切さを理解した。歴史から学んだことを教訓にし、未来に繋げていくのが今回の講演会を聞いた私達の役目であることを先生、教授に伝えていただいた。私達もまた次の世代に教訓となれるよう、今やれる事を精一杯努力していきたい。
3．素晴らしい講演会でした。
4．WHO のマーガレット　チャン事務局長はとても重荷を背負っていらっしゃることに驚いた。感染のスピードとの競争、少ない情報でその決断を行い、その決断が生命に係わるという重責は大変だと思った。新型インフルエンザに対するさまざまな判断を下されたことに感謝する。グローバルインフルエンザサーベイランスネットワークというところで年１回集まりパンデミックについて協議したり GOARU オペレーションという機関で各国を助け、国と国を繋げさまざまな対策を行っていることを聞いて感謝する。これからもこのような機関が増え世界中が協力し感染症等の病気を抑えていって欲しい。今回のシンポジウムを聞いて自分自身が世界の役に立つことを何かしたい。この機会に多くのことを学べた。
5．僕が知っていた天然痘は奈良時代に流行したという（そのため東大寺が造られた）ことだったが、この講演会で天然痘は今もあり致死率も高いということにとても驚いた。
6．天然痘という名前は聞いたことがあったが、症状などについて知る機会が無かった。今回の講演、シンポジウムを通して症状や根絶へ辿り着いた経緯を学ぶことが出来た。蟻田先生の講演で金銭的、国家間の壁に阻まれながらも根絶という目標に向かった軌跡には感動した。シンポジウムでは４名の先生が同じ考えとして国、人種、を超えた協力、調査研究に基づく対策が非常に重要であるということだった。感染症対策に尽力される方々を忘れてはいけない。
7．天然痘は根絶されても他のウィルスのワクチンを作り発展途上国など全ての人々がワクチン接種ができる環境づくりをする必要があると思う。
8．天然痘の恐ろしさを改めて感じた。またその難題に取り組む活動過程や発想の転換、そしてそこから伝わる科学者、医療関係者、WHO の職員の熱意に感動した。他の感染症根絶のためにももっと伝えていただきたい。

進歩、進化しているのは感染症だけでなく、それを予防するワクチンもだということを知った。

・ワクチンはどのように作られているのか。

・ 副作用の度合い、出る確立はどのように決まるのか。

・ 感染症はどのように発生するのか。

という疑問を持った。質疑応答の時間が欲しかった。

9．天然痘という感染症が世界各地で流行っていたことを知らなかった。もし、WHOや人々の支援がなかったら今でも流行っていたかもしれない。この取り組みに当たられた方々に感謝する。今日の講演会・シンポジウムでは初めて知ったことばかりで、今日の世界を作り、救ってくれた方々を知らなかった事が情けなく思った。

１０． 天然痘という感染症について何も知らなかった。今回のような講演会に参加したこともなく話を聞くだけかと思っていたら、いつのまにか資料の片隅に気になった事や驚いた事についてメモしていた。

たった２票差で始まった天然痘根絶計画。根絶のためワクチンを打っても天然痘に感染するかもしれない環境の中で自分の手や足や紙、ペンなど私達ですら持っているものだけで大きな発見をしたということに驚いた。

WHO のスタッフ、現地の方、研究所で努力頂き天然痘根絶が実現したと知り、もし、日本に生まれてなかったら、もし、もっと早く生まれていたらと想像するととても恐ろしくなったと同時に感謝した。今回の講演・シンポジウムは天然痘を忘れない為、この功績を伝える事が目的と聞いた。この学びをまずは家族に伝えたい。一番心に残った事は、ワクチンの開発と同じくらい民族や宗教などを超えた人と人とのつながりや協力が大切であるという事。

１１．生物分野と関係があるということ、近年の人類の問題であるということ。この２点から私にとってとても興味深い講演内容であった。天然痘という感染症すら知らなかったので今回聞いてとても貴重な体験であった。

感染症について近年の問題、「若年代の危機感がなくなった」があげられると思う。大きな意味は感染症の知識がないこと。今回の講演で若者が病気に対する味方を変えなくていくことが必要。新型インフルエンザのように他の感染ウィルスが進化することはないのか。新しい型のウィルスに対するワクチン開発が追いついていないケースがおこっているので今後どのようになるか気になり、油断できないと思う。

アメリカの国を揚げた取り組み、目標達成後も調査費等を続ける姿勢に感心した。国際交流が盛んになった現在、感染症が病気で最も気をつける種類だと思うので日本も研究、対策にもっと力をいれて取り組んで欲しい。

１２．貴重な講演会・シンポジウムに参加させていただきありがとうございます。

蟻田先生は勿論、世界的に著名な先生方の話を聞けて生徒達にも刺激になったと思これからの感染症対策を考えさせられた．ワクチンの研究，効果的なこと再認識した。２階席からのパワーポイントは字が小さかったことが残念。

１３．勉強になった。

１４．ワクチン接種で根絶はできる。私も活動に参加したい。

１５．授業であまり学習しなかったが、今回の講演・シンポジウムで根絶への取り組みを知り凄いと感じた。もう少し話を聞きたかった。

１６．感染症の世界的現況、対策について分かりやすい講義を聞く事ができた。教育とアクション（行動）の大切さを痛感した。

１７．ワクチンの必要性について再確認し、勉強になった。

１８．今日の講演で天然痘について知り、考える事ができた。これまで大学の授業などで天然痘という言葉は聞いたが詳しくは知らなかった。写真などでとても分かりやすく以前より少しだけど理解が深まった。シンポジウムに参加したのは初めてだったが４名の先生の話を聞く事が出来良い体験になった。文字が小さかった。

１９．天然痘の写真を見て正直驚いた。これまで天然痘やジェンナーという言葉は聞いたことがあったが実際どのようなものか知らなかった。天然痘は失明したり全身に発疹が出たり、ワクチンを接種しても１００人に１０人位は亡くなると聞いて恐ろしい感染症だと感じた。天然痘を根絶するのは本当に大変だと思うし、根絶から３０年も経過した事は凄い。現在、私達が元気で天然痘にかからないでいるのもワクチン開発や根絶するために多くの方々の尽力があってのことだと感じとても勉強になった。

２０．天然痘、ポリオ、はしか、インフルエンザはニュース等で聞き、授業でも習っていたが、天然痘については症状や有病率しか知らず根絶までの努力などは今回初めて聞いた。感染は広まるのが早いのにそれを無くすまで各国の政治理念や人種、宗教を超えた理解、協力が必要である事を学んだ。しかし、現在同じような事が起こったとき同じように解決できるのか疑問に思った。一つの病気を根絶するためには、人材、費用などたくさん必要だと思った。

２１．天然痘がどういうものか今日の講演を聞くまで知らなかった。こんなに恐ろしいものだとも全く知らなかった。将来、医療従事者を目指す者として今回のイベントはとても為になった。天然痘という恐ろしい感染症と戦う為には一人の人間、一つの国では成し得なかったことと思う。多数ではなかったが根絶対策の為に立ち上がった人、全世界が協力したことが根絶へとなったと思う。感染症には国境がないことを強く実感した。何かを根絶するためには、全世界が協力しなければ不可能なのだと感じた。

２２．天然痘とあまり馴染みがなかった。その天然痘根絶に熊本の方が貢献されたと知

り大変驚いた。根絶には非常に多くの苦労と努力があったと聞き根絶から３０年になることに感動した。根絶に何故成功したのか、その理由に人種、国境、宗教、政治理念を超えて協力があったことに世界は協力すれば根絶が可能になると実感した。また、天然痘根絶をもとにポリオ、はしか、風疹、エイズなどについても根絶するよう今努力されているということは、天然痘根絶があったからだと分かった。天然痘根絶の実態を私達は知っておかなければならないし、伝えていかないといけないと思う。貴重な講演を聞く事ができて嬉しく思う。

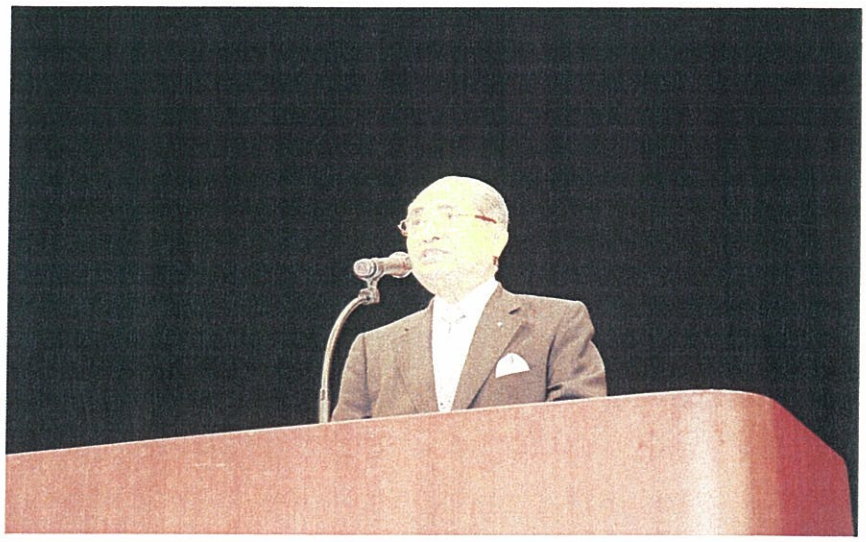
２３．多くの人々の協力により根絶する事が出来たことが分かった。たった３０年前まで天然痘が存在していたことに驚いた。根絶できると考えられる感染症についても多くの人々の協力によって根絶に成功していったらいいと考えた。

２４．初めて、天然痘という言葉を知った。これから多くの病気を見ていくと思うが、このようなシンポジウムで少しでも多くの知識を身につけたい。

２５．わざわざ、WHO や関係の先生が来ていただき感謝します。天然痘は病状が分かり易い。１０万人に１０人程度のワクチンによる副作用が出る。天然痘は今後発症する事はないか気になった。発症の際、治療法はあるのか。１００％の完治は。各国にあったやり方で根絶したことは凄かった。小学校の授業に取り組んだのもいい方法と感じた。戦術の科学的研究。天然痘根絶を機に様々な病気の根絶を目指す気になった。ワクチンの重要性が分かった。

２６．天然痘ウィルスによるテロ、再流行に対してワクチンの用意はあるのでしょうか。日本では如何ですか。

２７．質疑応答の機会を頂けると高校生達にとっても良かったのではないかと思った。ワクチンのリスクとベネフィットの比較というのは、薬の効用と有害事象の比較の一部だと思うが、日本人はリスクの方ばかりに注目していると思った。



天然痘根絶30周年記念事業
実行委員会
永野 光哉 委員長　挨拶

国立大学法人　熊本大学
谷口 功 学長 主催者挨拶

座長：国立感染症研究所
副所長　倉根 一郎　博士

Dr. Margaret Chan WHO事務局長の
メッセージを代読される
WHO西太平洋地域事務局感染症対策課
葛西　健　課長

Japan conference commemorating smallpox eradication
Message from Dr Margaret Chan, WHO Director-General

Greetings from WHO headquarters in Geneva, where a new statue, commemorating smallpox eradication, now stands in pride of place.

it reminds staff and visitors alike of a truly remarkable success story with permanent gains for health in every corner of the world.

Public health must never cease to remember its success stories, and to learn from them. The history of smallpox and its eradication has been written and public health continues to benefit from the many lessons learned.

I am pleased to honour Dr Arita's contribution to that history as one of its authors. He fought smallpox in western Africa, and later, served as Chief of the Smallpox Eradication Unit at WHO.

Leadership at WHO was important, but an achievement of this scale ultimately depended on tens of thousands of dedicated workers who literally crisscrossed this entire earth. They travelled by jeep, donkey, and fishing boats, on foot in jungle and desert journeys, from nomadic tribes in remote mountain areas to pavement dwellers in the scorching heat of Asia's slums.

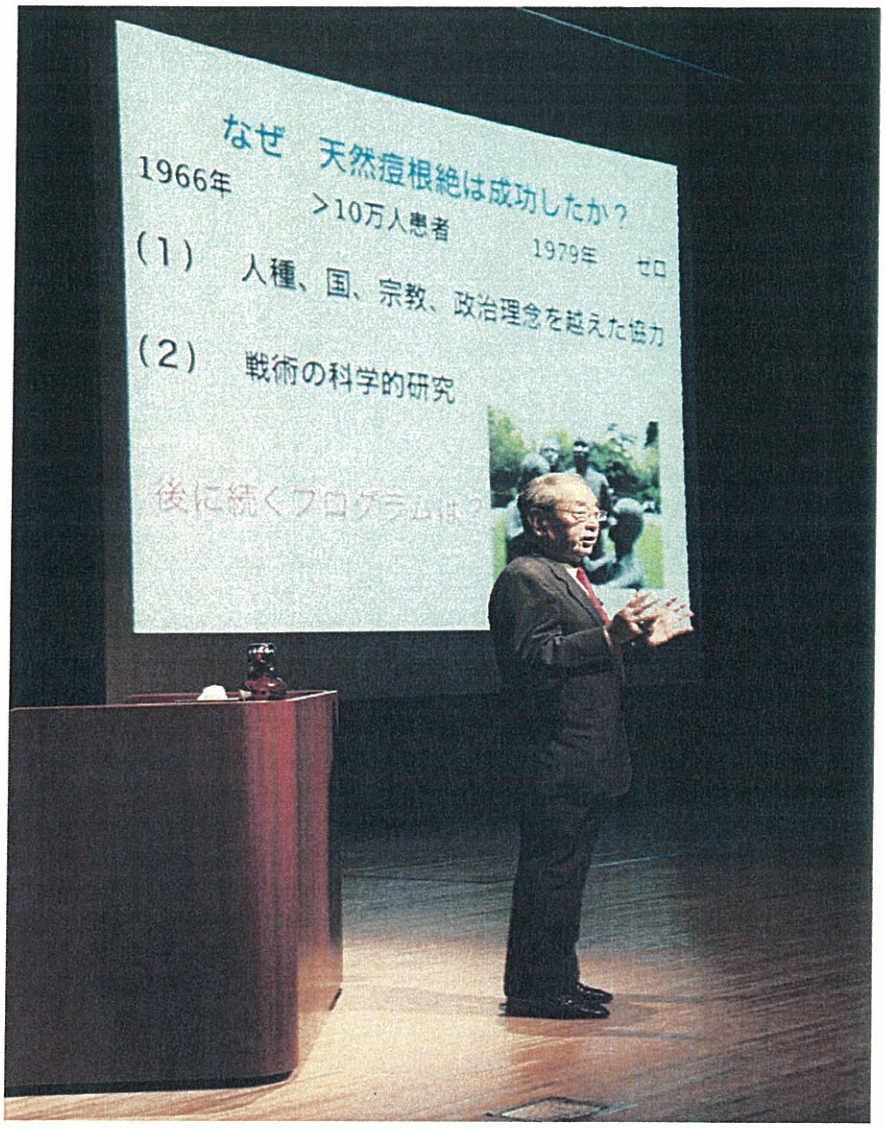
Despite the incredible odds, one of history's longest chains of virus transmission, dating back at least 3,000 years, was finally broken just a decade after the intensified eradication programme was launched.

This achievement, which you are honouring today, recalls a time of great idealism that attracted talent and inspired commitment and personal sacrifice.

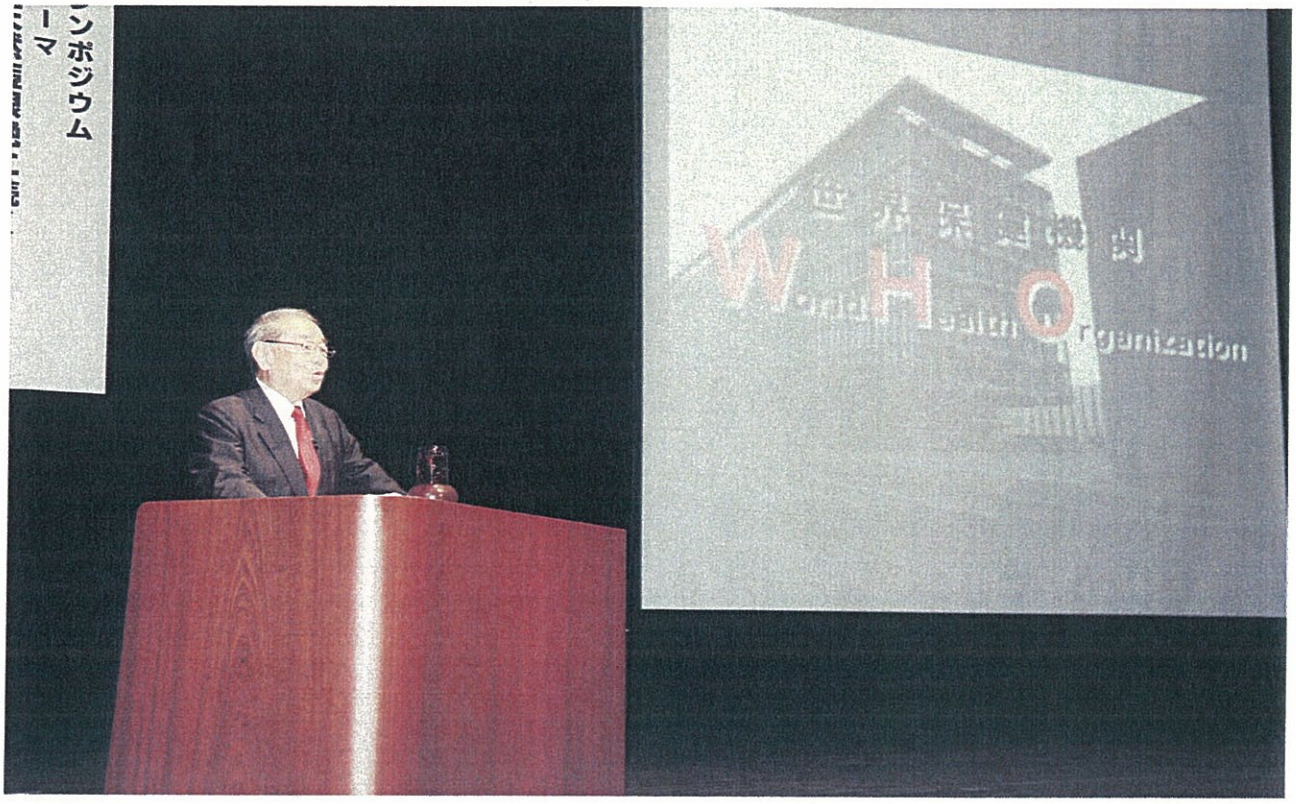
Above all, smallpox eradication is a reminder of the power of international health cooperation to do great and lasting good.

Thank you for keeping this memory, and this spirit of cooperation, alive.

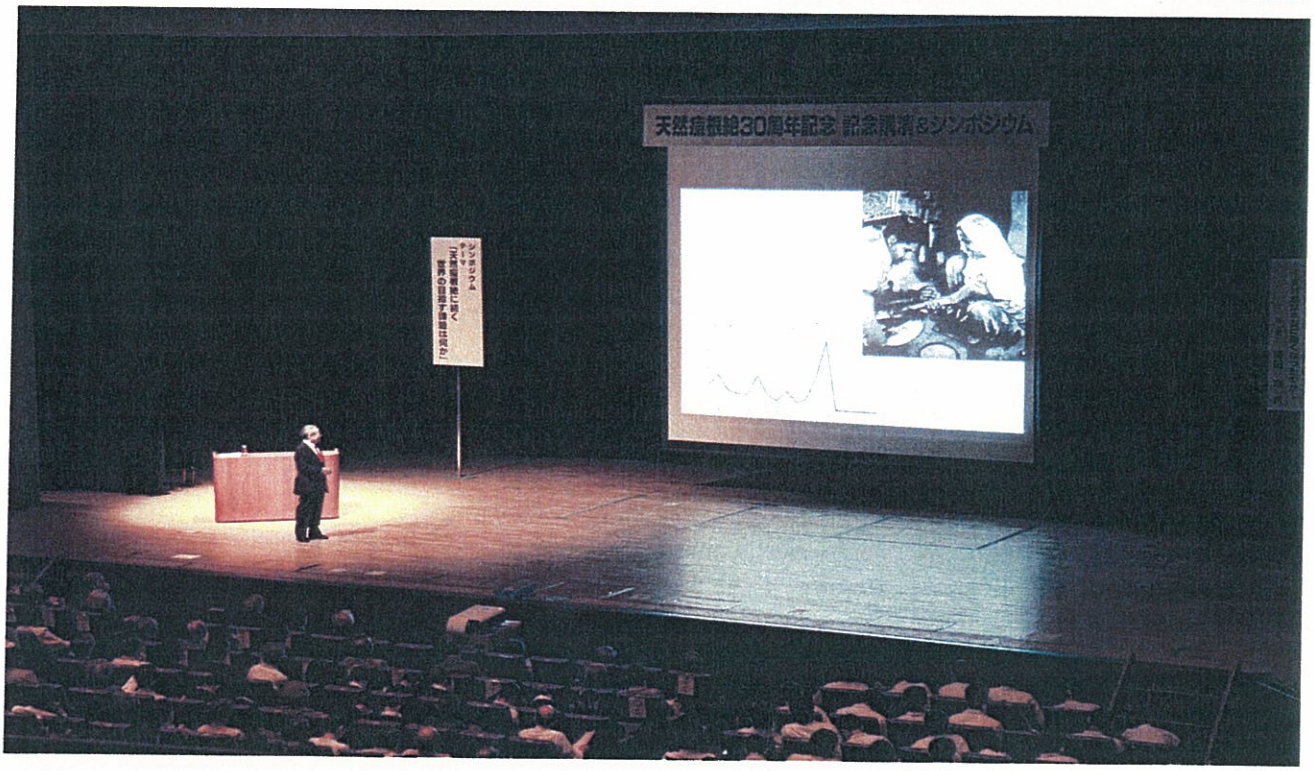
〜 WHO マーガレットチャン事務局長からのメッセージ 〜

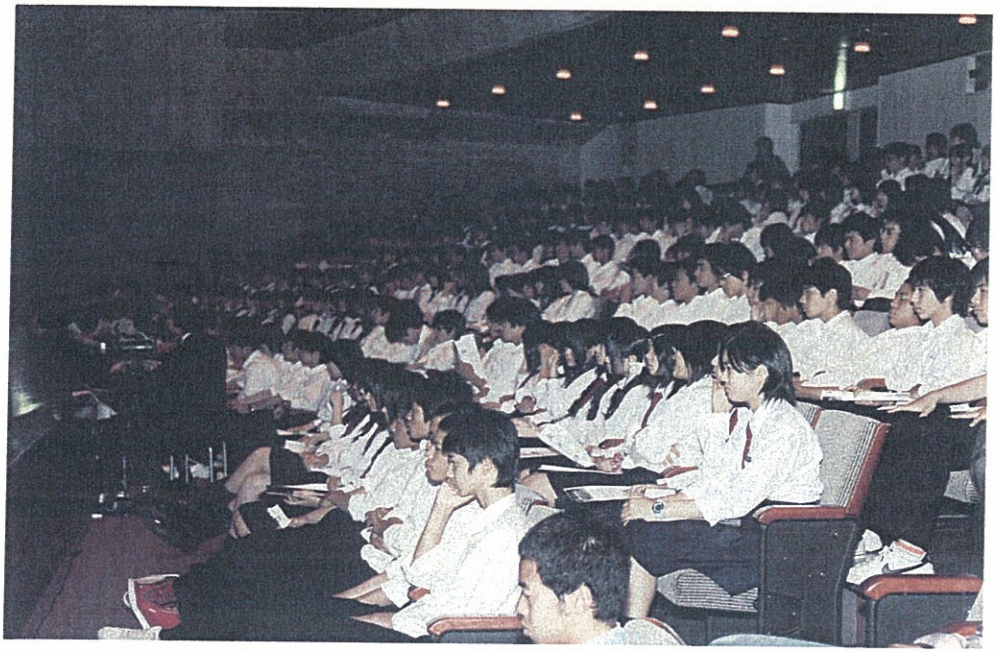


基調講演
蟻田　功　博士
「天然痘と人類の未来」

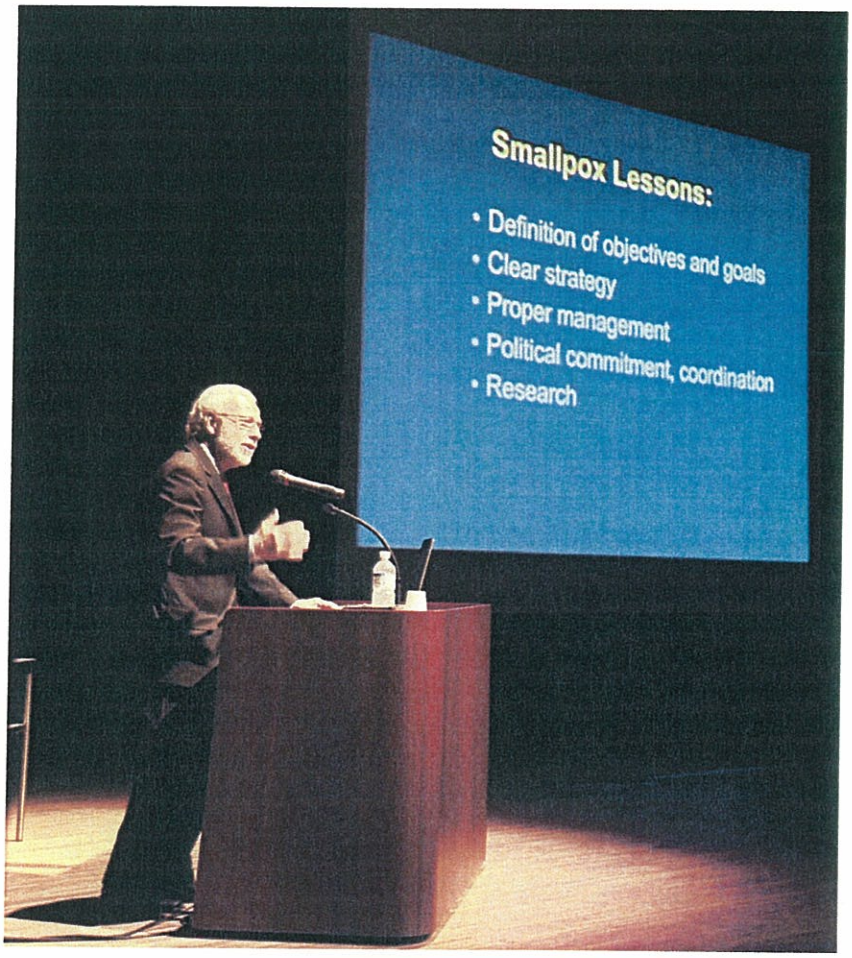


基調講演会場



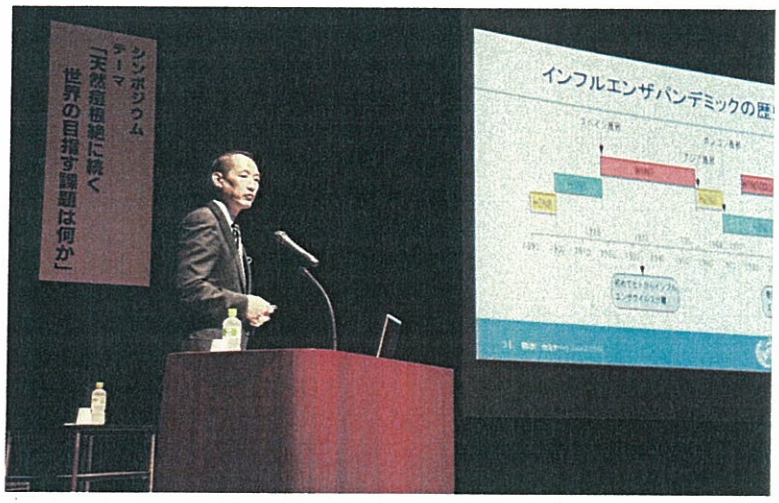


シンポジウム
Dr.Ciro A.deQuadros
「天然痘根絶に続く世界」



シンポジウム
Dr.Jean-Marc Olive
「感染症制圧と移り変わる世界」

シンポジウム
山本　直樹　博士
「エイズと国際問題」

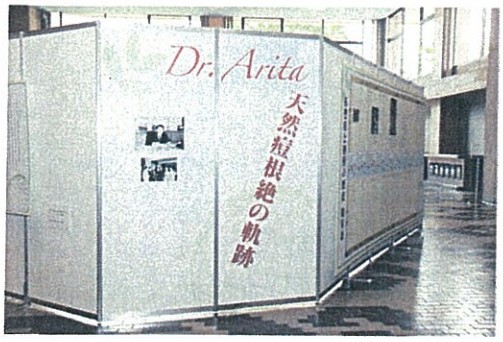


シンポジウム
葛西　健　医師
「インフルエンザとパンデミック」

（左から）倉根一郎 博士・山本直樹 博士・Dr.Jean-MarcOlive・
蟻田功 博士・Dr.Ciro A.deQuadros・葛西健 医師

資料展示風景

蟻田　功 博士　　略年譜



天然痘と種痘の歴史　略年表

天然痘根絶確認宣言書

「天然痘根絶30周年記念

天然痘根絶と人類の未来の講演を聞いて」

講師　蟻田功博士

平成22年6月3日（木）提出

熊本中央高等学校看護学科看護専攻科

今回、天然痘根絶30周年記念の講演を聞いて、自分がどれだけ天然痘についての知識が乏しかったかを実感することが出来ました。授業でも、天然痘はもう根絶しているから、という理由でほとんど流すような授業でした。ですから私は、天然痘に感染すると、特有の発疹が出来ることも感染者の約30%が死亡していたということも、今日の講演で初めて知ることが出来ました。

蟻田博士の講演を聞かせていただいて、あきらめないことの大切さや、皆に出来ないと言われたことの偉大さを学ぶことが出来ました。たくさんの人々に、「根絶は出来ない」「無理だ」と言われ続けても、蟻田博士を始めとする天然痘根絶プロジェクトのメンバーはあきらめずにワクチン接種を続けたことは大変すごいことだと思います。私が蟻田博士の立場だったら、きっと根絶は無理だと、あきらめてしまったと思います。蟻田博士は、天然痘根絶プロジェクトが成功したのは、そ

のチームが、少数精鋭主義だったからだと言われました。少数精鋭ということは、やる気のある人ばかりが集まり、対策に集中出来たので逆に少数で良かったとおっしゃられました。この言葉を聞いたとき、私は人数が少なくても、皆のやる気や集中力、またはチームワークによって、すごいことを行うことが出来るのだと知りました。様々な対策を、やってもやっても上手くいかないときは、あきらめず皆で次の対策を考えることが大切なのだと知ることが出来ました。これは、看護についても言えることだと思います。看護の場合は、少数精鋭というわけにはいきませんが、他の医療スタッフと協力し合い、患者様に一番合ったケアを考えていくことは、とても大切なことだと思います。普段の学校生活でも6回生全員が協力し合って、チームワークの良いクラスを作っていきたいと思いました。また、天然痘が本当に根絶したのかを確認することも大切なことだと思いました、私達も

看護計画を立案・実施し、それが本当に効果があったのかを評価します。この方法で良かったのか、どれだけ効果があったのかまたは無かったのかを知ることは、とても大切なことだと思います。今回の講演を聞いて改めて実感することが出来ました。

この天然痘根絶プロジェクトの戦略や管理の仕方を参考に、ポリオや麻疹等の感染症根絶プロジェクトが実施されていると知りました。世界中で、いろいろな人が、世界中の人々の健康の為に頑張っているということを、今日の講演やシンポジウムを聞いて知ることが出来ました。私も、微力だとは思いますが援助を必要としている人々の助けになりたいと思いました。

天然痘根絶30周年記念

天然痘根絶と人類の未来の講演を聞いて

講師　蟻田　功博士

平成22年6月3日（木）

検
6.4
上国料

熊本中央高等学校看護学科看護専攻科

〈講演を聞いての学び〉

天然痘は1960～1970年代に流行した病である。症状は定型的な発疹が特徴とされる。10人中2・3人は死亡するといわれており、治ったとしても失明や瘢痕が残る。1977年に天然痘の最後の患者が確認された。大きさは7nm、人間だけに感染し、その治療法はないがワクチン接種の予防法がある。しかし、ワクチンの副作用として100万人に10人の確率で脳炎、湿疹、潰瘍が現れる。本来ワクチンは冷蔵保存であったが、乾燥した地帯でも保存が可能なワクチンが開発された。天然痘による被害をWHOは統計で10万人と推測したが、蟻田博士は1000万人に被害が及んだと考えた。今後も天然痘の再流行や生物テロの危険性が考えられる。長い間世界を悩ませ続けた天然痘の根絶に成功出来た要因は、人種・国・宗教・政治理念を越えた協力と、戦術の科学的研究であるとされている。

〈シンポジウムを聞いての学び〉

アメリカではポリオの根絶に着手しており、1988年に国際連合で2000年までに根絶するといわれたが、アフガニスタン・パキスタン・インドでの根絶が困難とされ、今では2013年に根絶計画が有効であったと示されるのを目標としている。はしかについては1994年、ポリオの後に根絶計画が進められている。はしかは未だ死亡する患者数が多く、失明もする危険な病である。2000年に最後の患者が確認され、根絶計画が進められていなかったら1万64人が死亡していたと推測される。風疹については、はしか程深刻ではないが、妊婦が感染すると胎児に心臓や眼の異常が出てくることが問題とされている。風疹の根絶は比較的に簡単であり、アメリカでは1～4歳児にワクチンのキャンペーンを実施したところ、効果が表れ、2009年に根絶が達成した。

〈講演を聞いての感想〉

今日、天然痘根絶30周年の記念講演を聞いて、感染の恐ろしさを学び、それを根絶しようと闘う人々の誠意に感動しました。感染して発症した病は簡単に死に至らしめる程の怖いものなのに、根絶計画を進めてきた方々は正義感の強い人たちなんだと感じ、尊敬しました。自分がいつ感染するか分からないという、常に危険と隣合わせの中、人のため、世界のために動き、根絶に成功する計画を進めたことは偉大なことだと思います。また、人を救うことがどれだけ素晴らしいことなのかを知りました。

実際に実習で臨床の場に出たとき常に「一処置一手洗い」を守ったり、日頃の生活の中でもこまめに手洗い・うがいをするなど、私たちにとって感染は必ず付いてくる問題の1つだと思います。昨年にも大流行した新型インフルエンザでも感染の被害の恐ろしさを感じたことを覚えています。人から人へと感染

するものに対しては、1人ひとりの予防の知識を広げることと、その意識を高めていくことが大切だと思いました。それは自分1人だけの問題とするのではなく、周りにも影響を及ぼすのだと理解して、身近で容易に出来ることから行っていけば、少しでも感染の被害を広めるのを防げるのではないかと思います。また、いつ再流行するか分からないからこそ今のうちから身に付けておくべきルールだと思いました。

1つの問題を国を越えて全世界の問題として、解決のために取り組んでいることを知り、とても勉強になりました。

天然痘根絶30周年記念

「天然痘根絶と人類の未来」

の講演を聞いて

講師　蟻田　功博士

平成22年6月3日（木）提出

熊本中央高等学校看護学科

看護専攻科

私は天然痘の名前は聞いたことありましたが、天然痘がどのような病気で、どんな症状がでるのかということを知りませんでした。天然痘というのは発疹ができ、痛みがあり、治っても瘢痕が残ったり、失明をしたりするとても恐しい病気であった。1960～1970年代に天然痘の流行があり、それをきっかけにWHOが中心となり根絶を目指していくようになった。WHOの天然痘根絶プロジェクトリーダーとして、プロジェクトを主導したのが熊本県出身の蟻田功博士であった。根絶にはワクチンの接種がとても効果的であった。天然痘患者の発見のために写真を見せたりし、ワクチン接種や封じ込め作戦を行い、根絶へと導いた。しかし、ワクチンには副作用があり、100人中10人が潰瘍や湿疹ができてしまったり、最悪の場合死亡する人もいるというリスクがあるなかで接種をしていかなければならなかった。1977年にソマリアで天然痘最後の患者が確認された。それから3年後の

1980年にWHOから天然痘根絶宣言がされた。今年で根絶宣言から30年である。根絶した理由は2つある。1つは、人種、国、宗教、政治理念を越えた協力があったこと。2つ目は戦術の科学的研究があったこと。

私はこの講演を聞き、とても流行していた感染症が根絶までたどり着いたということにとても驚いた。それを成し遂げたのが日本人で、しかも熊本県出身の方であったためとても誇りだと思った。

~~天~~天然痘はとても感染力が強かったため、全世界で問題になっていたものを根絶まで導いたことにより、世界中の人々に天然痘に感染しなくなり安心感をもたらしたと思う。今も根絶宣言がされていなかったら、人々は天然痘に恐れて生活をしていたと思う。そして多額のお金も必要にしたとも思う。それを考えると蟻田博士のされてきたことはまさに偉業だと思った。

これからの将来、問題となっていくことは

蟻田博士も言われていましたが、ウイルステロが行われるかもしれないという問題だと思う。もし天然痘がテロに使用されたら、免疫がほとんどない人が多いためパンデミックがおきる可能性もある。ウイルスが保管してある研究所では、しっかりと管理をして頂き、私たちはそのようなことが起こっても、正しい知識を持ち対応していかなければならないと思った。

これらのことは天然痘だけではなく、他の感染症にも言えることだ。根絶しているいないに関係なく、その感染症の特徴についての正しい知識を持ち、正面から向き合っていくことが大切ではないかと思った。

天然痘根絶30周年記念

「天然痘根絶と人類の未来」

の講演をきいて

講師：蟻田　功博士

平成22年6月3日(木)提出

熊本中央高等学校看護学科看護専攻科

天然痘根絶三十周年の記念講演を聞いて、今まで天然痘について深く勉強することができていなかったのでとても勉強になった。

まずはじめに、ビデオ上映の中であった天然痘は治療法はないが予防法はあるということを知った。治療法もあるから根絶していくことができたのだと思っていたが、予防法だけで根絶したということに驚いた。また、予防の方法も全員に予防接種を行うのではなく、発病患者の周辺の人々に予防接種を行うことで拡大を抑えていく考えは思いつかなかった。もちろんこれだけではなく、人種や国、宗教、政治理念を超えた協力、科学的研究のおかげでもあることを学んだ。しかし、天然痘が根絶したいまでも、生物兵器として天然痘が使用される可能性もあることは忘れてはいけないんだと感じた。他のウイルスだけではなく、天然痘ウイルスも今後合成されると蟻田先生のお話でもあったように、再流行では一ヵ月で三百万人に感染する。こういった知識をも

とつけていかないといけないと考えた。

デクワドロ先生のお話ではポリオ、麻疹、風疹のお話だった。アメリカでは6年間でポリオをなくした。しかし今でも麻疹、風疹、ポリオは根絶されていない。デクワドロ先生は天然痘が根絶した時と同様にこの3つも根絶することができるとおっしゃった。私も近い将来これらの感染症が根絶していってほしい。葛西先生はパンデミックの経験と世界の感染症対策について話された。パンデミックは繰り返し流行するということと、最近起こった新型インフルエンザでは改めてその流行の速度に怖いと思った。また、ウイルスよりも噂が早く広がったとおっしゃったことが印象に残った。正しい情報や知識を身につけていくことが私たちには大切なのだと感じた。山本先生は感染症とワクチンについて話された。今はもはや治療の時代より予防の時代で、さまざまなワクチンがある。そんなかでアメリカに比べて日本は認可されているワクチン

の数が少ないということが問題だと感じた。また、山本先生は副作用のないワクチンを作れたらいいが、副作用のないワクチンは効き目がないとおっしゃった。ワクチンは軽い病気を起こさせその先におこる重篤な症状を予防するというお話が副作用について納得できた。オリベ先生のお話では、東南アジアなどではまだ二万三百万人の子どもたちがワクチンの接種ができていないという現実を知った。ワクチンの必要性というのは、東南アジアの人々だけでなく、いろいろな国に伝え世界で協力していかなければ問題というものは解決しないと思った。最後におっしゃられたように、戦いはそう簡単に終わらないという言葉がまだまだやるべきことの多さなんだろうと感じた。

今回、このような貴重な記念講話を聴くことができてとてもよかった。

天然痘根絶30周年記念

「天然痘根絶と人類の未来」

の講演をきいて

講師：蟻田　功博士

平成22年6月3日（木）

熊本中央高等学校看護学科看護専攻科

今回、天然痘根絶から30周年を記念しての講演をききに行きました。熊本出身の蟻田功博士が中心となって全世界を脅かしていた天然痘を根絶するという偉業を成し遂げられたということはとてもすばらしいことだと思いました。

天然痘とは、以前は治療することができず予防する方法しかなく、10人に2～3人は死に至るという病気でした。治ったとしても、瘢痕として残ったり失明したりするととても恐れられていました。

しかし医療技術の進歩により、冷蔵保存からアフリカや東南アジアのように冷蔵保存ができない土地でも使えるように乾燥させて熱に強いワクチンが開発されました。そして、それまでは神に拝んでいた宗教的な行為からワクチン接種というような新しい技術を取り入れた医療を天然痘根絶計画として進めていきました。そして、1980年に天然痘根絶の成功を全世界に宣言されました。

天然痘は世界に存在しないのかと言うと、研究材料としてわずかに残っていると言われました。また、今一番恐れられているものとして培養や合成をして天然痘を用いたテロが起こる可能性があるということをきき、とても怖いなと思いました。

最後に天然痘根絶が成功した要点として、「人種、国、宗教、政治理念を超えた協力」「戦術の科学的研究」の2つがあげられていました。1つめの要点では、天然痘根絶において全世界の人々が協力をすると、とても大きな力になるということがはっきりと結果として目にみえたケースだと思いました。2つめの要点では、医学の進歩により成果を出せたと思う半面、次の危機につながってしまうということがわかりました。

今回、熊本から世界を舞台に活躍された蟻田功博士の講演をきくことができて、本当によかったしいい経験になったと思いました。スライドを用いて、写真やグラフなど具体的

なものを提示されていたのでわかりやすかったと思いました。天然痘は本当に恐しいものだということを感じました。今はそのウイルスを用いたウイルステロが心配されているのがとてもよくわかりました。蟻田功博士がこの講演で話されたことが一人でも多くの人に伝わってもらえたらいいなと思いました。また、蟻田功博士のように自分の信念を曲げずに努力すれば必ず結果として反映されるということを学ぶことができたと思います。

天然痘根絶30周年記念事業実行委員会名簿

	氏　　名	主な役職
顧問	蒲島　郁夫	熊本県知事
顧問	幸山　政史	熊本市長
顧問	山本　直樹	シンガポール国立大学教授
		(前国立感染症研究所エイズ研究センター所長)
委員長	永野　光哉	㈱熊本日日新聞社名誉会長
		(50音順)
副委員長	﨑元　達郎	熊本大学顧問・名誉教授　前熊本大学学長
副委員長	潮谷　義子	前熊本県知事・長崎国際大学学長
副委員長	世良　喜久子	日本ユニセフ協会熊本県支部事務局長
副委員長	谷口　功	国立大学法人　熊本大学学長
副委員長	西島　喜義	熊本市副市長
副委員長	福田　稠	熊本県医師会会長
副委員長	村田　信一	熊本県副知事
副委員長	米満　弘之	熊本大学同友会代表幹事
		(50音順)
委　員	伊豆　英一	熊本日日新聞社社長
委　員	上田　祐規	熊本県私立中学・高等学校協会会長(鎮西高校長)
委　員	大羽　宏一	尚絅大学学長
委　員	加藤　雅史	東海大学副学長(九州ｷｬﾝﾊﾟｽ)
委　員	清重　尚弘	九州ルーテル学院大学学長
委　員	清永　和子	国際ソロプチミスト熊本会長
委　員	小栗　宏夫	熊本経済同友会代表幹事
委　員	小野　友道	熊本保健科学大学学長
委　員	古賀　実	熊本県立大学学長
委　員	小堀　富夫	熊本市国際交流振興事業団代表
委　員	最相　博子	熊本同時通訳者協会代表
委　員	坂本　正	熊本学園大学学長
委　員	重松　節美	熊本県看護協会会長
委　員	堤　　弘雄	熊本YMCA総主事
委　員	中尾　保徳	熊本県商工会議所連合会会長
委　員	中山　峰男	崇城大学学長・熊本ユネスコ協会会長
委　員	畠山　経彦	NHK熊本放送局局長
委　員	福島　敬祐	熊本市医師会会長
委　員	二塚　信	九州看護福祉大学学長
委　員	船津　昭信	(財)化学及血清療法研究所理事長
委　員	室原　佳江	国際ソロプチミスト熊本-さくら会長
委　員	蓑茂　寿太郎	熊本県立大学理事長
委　員	山崎　勝	国際ロータリー2720地区ガバナー
委　員	山部　征三	熊本県国際協会理事長
委　員	米澤　静江	国際ソロプチミスト熊本-すみれ会長
委　員	米村　昌子	国際ソロプチミスト熊本-わかば会長